

兵庫県生物学会60周年によせて

兵庫県生物学会オーガナイザー 室井綽博士

第7代会長 当津 隆

人間を知的型と情的型に分類すると、室井博士はどちらに入るのであろうか、学究肌の厳しい植物学者に接したひとたちは、知的人間として畏敬することであろうが、若かりしころの酒豪ぶりに接した連中には、ほろ酔い気分で室井節にしびれたものである、気配りの行き届いた優しい苦労人に見えたのである。

この人間的、学者気質に魅せられて、相集い立ち上げたのが兵庫県生物学会である。昭和22年の春のことであった。学会生みの親、室井綽はすでに、竹と笹の権威者として著名であったが、未だ30歳を越えたばかりの新進気鋭の研究者であった。

後に会長になる紅谷進二と学会の要として辣腕を發揮した渋谷久雄と組んだトリオが、兵庫県生物学会の基盤を固め、森為三博士を初代会長に迎えたのであった。日本生物教育学会の全国大会を、東京・京都に次いで第3回大会を神戸で開催できたのも室井の功績である。当時の学会を支えた会員にはそうそうたる研究者がひしめいていた。いまは亡き、牧野富太郎博士直伝の植物学者川崎正悦、貝類研究家古川博二、海草の権威広瀬弘幸博士、水産学博士となった富川哲夫、化石の佐藤茂樹、羊歯に生きた稲田又男、貝と昆虫の東正雄、理化教育の虫、一色八郎、六甲高山植物園長北村博史はブナ吉であった。折を見て『兵庫県生物学会百人衆』を編んで後世に遺したい人物ばかりである。いずれも端然とした達人たちが、若い室井に一目おいていたのだ。すでに博士になることを予知していたのである。兵庫県や神戸市の文化賞などにも輝いて大先輩たちの期待に応えたのはさすがである。

研究に没頭している最中、突然の禁酒宣言、ピタリと俗物と縁を切り、さらに学識を高める道に専心した。卒寿を越えてなお、室井節は『草木の会』をはじめ衰えない。真夏の御殿場の『竹笹の研究会』を主宰して後進を叱咤する。富士竹類植物園長として世界への発信も続ける。『THE REPORT OF THE FUJIBAMBOO GARDEN』はNo.50' 06を迎え、まさに、意気軒昂の老学、恐るべき鬼の竹博士である。あらためて、『室井綽博士物語-竹と共に七十年』-兵庫県生物学会創立40周年記念発刊-をひもといて、そのパワーを確かめた。

平成大震災被災、神戸から姫路に居を移し、愛妻に先立たれての独り住まいのなか、書齋を出て、折々の

植物との対話に専念する、自然に親しみ、そして、人を愛す暮らしは変わらない。しょっちゅう電話がかかり、「元気か、勉強しているかね」とくる。大病を患い危うい命を抱える身には良薬となる仏声である。